

〈研究・調査報告〉

文化観光資源としての演劇のダイナミズム ーロンドン・ウエストエンドの事例からー

甕 佳代子

【要旨】

ロンドン・ウエストエンドはニューヨーク・ブロードウェイと並んで演劇を観光資源として誘客をしている都市である。日本の演劇界はウエストエンドとブロードウェイのヒット作のリバイバル上演がとて多く、この2大都市のトレンドはそのまま日本の演劇界のトレンドとなっているのが現状である。本稿では2024年2月から3月に視察・観劇したウエストエンドの話題作や劇場の様子を紹介、直後に発表されたローレンス・オリビエ賞の結果と比較してウエストエンドのトレンドを分析、日本の演劇界への影響を考察したものである。

キーワード：演劇、ウエストエンド、文化観光、ミュージカル

1. はじめに

ロンドン・ウエストエンドはニューヨーク・ブロードウェイと並んで演劇を観光資源として誘客を可能としている地域である。日本の演劇界においては、特にミュージカルなどウエストエンドとブロードウェイのヒット作を輸入して上演することが多く、この2大都市のトレンドはそのまま日本の演劇界の動向に影響を与えているといえる。

特にウエストエンドについては、昨今日本との関係が急速に強くなっている。2023年にイギリスで最も権威のある演劇賞であるローレンス・オリビエ賞を6部門で受賞¹し話題となった“*My Neighbor Totoro*（となりのトトロ）”²は英語上演とはいえ設定は原作アニメーションのまま、すなわち日本人キャラクター主演かつ日本の風俗・文化から変更することなく、作品の世界観を舞台化することに成功した。これを端緒に2023年11月には梅田芸術劇場製作のミュージカル“*Pacific Overtures*（太平洋序曲）”³がメニエール・チョコレート・ファクトリー劇場との共同プロデュースを行って話題となった。

2024年4月には東宝製作の“*Spirited Away*（千と千尋の神隠し）”がロンドン・コロシウムで上演。この作品もスタジオジブリのアニメ作品の演劇化で、日本を舞台とした日本語上演ながら、2,359席の劇場を満席にして話題となった。また2024年6月には、これもまた日本のコミック原作をミュージカル化した“*Your Lie in April The Musical*（四月は君の嘘）”がハロル

ド・ピンター劇場で上演、日本のオリジナルミュージカルとしてウエストエンドで上演するのは初めての快挙であった。ちなみに“Spirited Away”については日本初演時から演出をジョン・ケアードが担当、“Your Lie in April The Musical”の作曲はフランク・ワイルドホーンと制作時から海外輸出を見据えたチーム作りであった。

今後日本からウエストエンドへの「輸出」は増えていくと思われるが、まだまだ圧倒的に輸入する作品のほうが多いのが現状である。今回は2024年2月から3月にかけてウエストエンドの話題の舞台を視察してきたことから、最新のウエストエンド舞台についての調査報告を本稿で行うものである。

2. ウェストエンドとは

ウェストエンドはイギリス・ロンドンの地区を指す。ロンドン中心にあるシティと呼ばれる地区から西へ発展した地区をさす。シティの発展に伴って17世紀末頃からここに聖堂、王宮、政府関係機関が建てられ、貴族、上流階級が高級住宅街区を形成しはじめたが、やがてピカデリー、ソーホー、レスターなどの広場を中核として一大商業地区ができ、現在はピカデリーサーカスを中心としてオックスフォード、ボンド、リージェントなどのショッピング街に高級専門店、映画館、劇場などが集中するロンドン最大の繁華街となっている。

このことからウェストエンドはイギリス・ロンドンの商業演劇街名、もっと広義にはロンドン演劇の代名詞として通称使用されている。アメリカ・ブロードウェイと並ぶ劇場街で、55もの劇場が集中⁴し、世界中から観客が訪れる。

ロンドンの文化シーンの中心を担うウェストエンドには長い歴史がある。1642年、清教徒によって全劇場封鎖がなされたが、1660年に禁止令が解除されると、ロンドンの劇場は繁栄し始め、それ以来、360年以上にわたってウェストエンドは住民や観光客を楽しませてきた。

現在も使用されているウェストエンド最古の劇場は、チャールズ2世の時代である1663年にオープンしたシアターロイヤルドルリーレーンである。徐々に劇場が増えていき、1720年にシアターロイヤルヘイマーケット、1806年にはアデルフィ劇場が開場する。その後、1843年の劇場法により演劇の上演に関する法律が緩和され、さらに多くのロンドンの劇場がオープンし、一大劇場街が誕生したのである。

中でもシャフツベリーアベニューには、6つの劇場があり、ウェストエンドで最も有名な通りとなっている。アポロ劇場、ギールグッド劇場、リリック劇場、パレス劇場、ソンドハイム劇場、シャフツベリー劇場がひしめき合い、最も賑やかで華やかな大通りである。パレス劇場は、世界的に上演されている演劇「ハリー・ポッターと呪いの子」の上演本拠地であり、2004年からミュージカル「レ・ミゼラブル」を上演していたクイーンズ劇場は、2019年にソンドハイム劇場に改名され、引き続き「レ・ミゼラブル」の本拠地となっている。シャフツベリーアベニューの認知度を示すように、ウェストエンドの紹介写真や記事にはソンドハイム劇場が

使用されることが多い。

参考までに Maps London より引用したマップ（図 1）を掲載する。

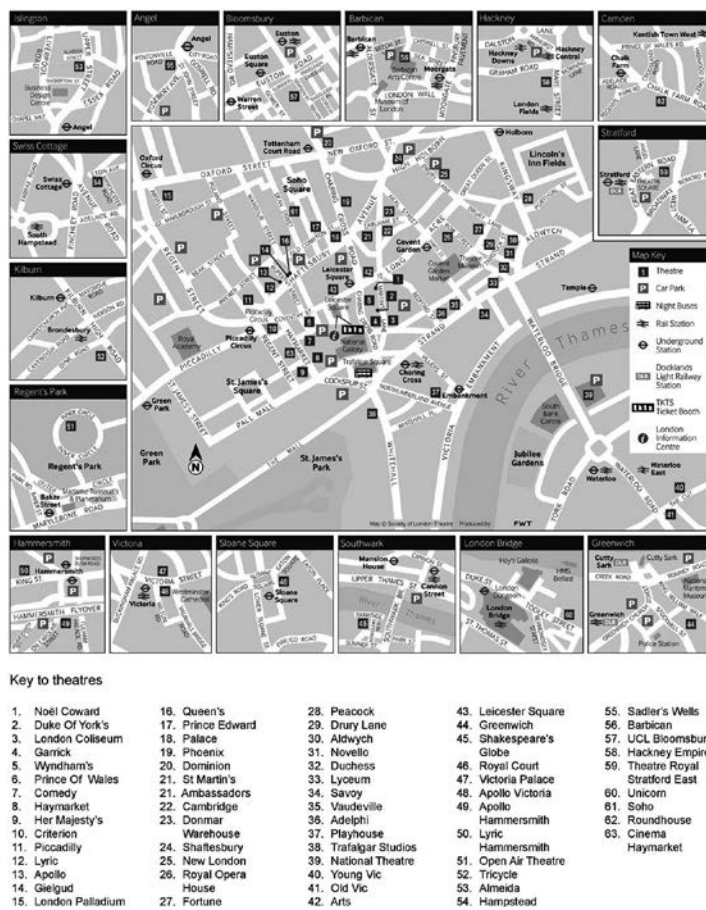


図 1 ロンドンの劇場マップ（Map of London theatres）

出典：Maps London

3. 2024年ローレンス・オリビエ賞に見る傾向

ローレンス・オリビエ賞（以下オリビエ賞と略す）はイギリス演劇における最高権威の賞である。アメリカにおけるトニー賞に相当するものである。イギリスの場合、アメリカと比較して役者はオールラウンダー、すなわち映画・TV・舞台をバランスよく行うことが多いが、中でもシェイクスピアのお国柄もあってか舞台至上主義的なところがあり、アカデミー賞よりもオリビエ賞の肩書を尊ぶ傾向にあるようだ。受賞の結果は興行の大きな箔付けになり、キャリアが大きく開けるきっかけになることもあって毎年注目されるイベントである。

本稿では2024年4月6日に発表されたオリビエ賞の結果から、ウエストエンドの動向とトレンドを分析したい。英国で上演されたものは英語で表記し、比喻等で使用する作品名や人名などについては、日本において一定の認知があると思われるものは日本語表記する。標記にば

らつきがあったり、日本語表記が難しかったりする人名や作品名については英語で表記した。

3.1 ローレンス・オリビエ賞とは

ローレンス・オリビエ賞とは、1976年に「Society of West End Theatre Award（ウエストエンド劇場協会賞）」として創設された賞を、1984年にイギリスの名優ローレンス・オリビエにちなんで名称変更した⁵ものである。イギリスで最も権威のある演劇賞とされており、過去1年にウエストエンドの劇場で上演された作品を対象とし、毎年春に発表される⁶。過去1年の間にロンドン演劇協会の会員である劇場で開幕した新作、かつ受賞カテゴリーに必要な最低公演回数を上演していれば、選考対象となる。

受賞作が日本の演劇界にもたらす影響は大きく、近年では2017年に新作演劇作品賞など9部門で受賞した“Harry Potter And The Cursed Child（ハリー・ポッターと呪いの子）”を筆頭に、2018年リバイバル演劇作品賞受賞の“Angels In America（エンジェルス・イン・アメリカ）”、2019年新作演劇作品賞受賞の“The Inheritance（インヘリタンスー継承）”、2020年新作演劇作品賞受賞の“Leopoldstadt（レオポルトシュタット）”などいずれも日本で上演され大いに話題になった。また2022年新作ミュージカル作品賞受賞の“Back To The Future—The Musical”も2025年4月に劇団四季による上演を控えているところである。

オリビエ賞には特別賞がある。イギリスの演劇界で傑出した人物に贈られ、受賞者リストは、演劇の歴史に名を連ねるさながら名士録のごとくとなっている。ローレンス・オリビエのほか、ラルフ・リチャードソン、ジョーン・リトルウッド、ジョン・ギールグッド、アレック・ギネス、ペギー・アシュクロフト、ハロルド・ピンター、ピーター・ホール、ジュディ・デンチ、アラン・ベネット、アンドリュー・ロイド・ウェバー、アラン・エイクボーン、マギー・スミス、ジリアン・リン、マイケル・フレイン、ニコラス・ハイトナー、ケネス・ブラナーが受賞している。

3.2 2024年の傾向

オリビエ賞ではミュージカル、演劇、オペラ、ダンスなど幅広い舞台芸術のカテゴリーでの賞があるが、本稿においては演劇とミュージカルについての考察を述べる。

オリビエ賞ではまず演劇、ミュージカルは別カウントで、その上に新作と再演（リバイバル）のカテゴリー分けがなされている。トニー賞においても同様のカテゴリー分けがなされており、例えば演劇の部門であれば再演され続けるシェイクスピアやチェーホフの名作とは別カテゴリーで評価されるため、一定数の新作劇が毎年クローズアップされるという効果をもたらす。日本の演劇賞は、ジャンルも新作・再演のカテゴリーもミックスで評価されがちであるので、新作発掘のためにも導入してもらいたいところである。

2024年の新作ミュージカル作品賞は“Operation Mincemeat”、第2次世界大戦下のヨーロッパで実際に行われた、英国諜報部がナチスを欺くべく取った極秘作戦、ミンスミート作戦を題

材にしたものである。先行して映画が作られているが映画はサスペンス感が強く、ミュージカル版は多彩な音楽とスピーディーな演出で大人気となったまさにイギリスならではのミュージカルである。トニー賞受賞後、輸入された“A Strange Loop”も評価は高かったが、やはりイギリス発というのが受賞の決め手だろう。

リバイバルミュージカル作品賞は“Sunset Boulevard”だった。ブリッジ・シアターの可変型劇場機構を見事に使った“Guys & Dolls”、トニー賞受賞作品の“Hedestown”の2作品もとても人気があり、甲乙つけがたいところだったが、そうになるとやはり英国人アンドリュー・ロイド・ウェバーの作品を選んだということなのかもしれない。ミュージカルの主演女優賞を受賞したニコール・シャージンガーによる大迫力のパフォーマンスとスタイリッシュな演出も評価が高かった。

新作演劇作品賞は“Dear England”、かつては世界有数のサッカー強豪国でありながら低迷を続けているイングランドが復権する過程を描いた作品である。サクセスストーリーで爽快感があり、また映像とパフォーマンス、演出でサッカーシーンを立体的に臨場感たっぷりに作り上げたことが評価されたようだ。伝説の名優ジョン・ギールグッドとリチャード・バートンがブロードウェイで「ハムレット」を、それぞれ演出家、主演俳優として上演する過程での衝突を鮮やかに描いた“The Motive and the Cue”はギールグッド演じるマーク・ゲイティスの品格ある演技やジャック・ソーンの緻密な戯曲でこちらも高く評価されていたが、新しさと挑戦という点で前者に軍配が上がった。この他結婚式での家族の相克を描いた“Till the Stars Come Down”もノミネートされており、これら3作品全てがナショナルシアタープロデュースであることも目立った。

リバイバル演劇作品賞は“Vanya”、アンドリュー・スコットがサイモン・ステューブンスによるチェーホフの「ワーニャ伯父さん」を元にした翻案劇で、主な8人の登場人物を一人で演じ分けるという作品で絶賛されていた。人気女優シェリダン・スミスの一人芝居“Shirley Valentine”も作品賞にノミネートされていたが、新しい解釈と試みのほうを高く評価されたようだ。このカテゴリーにはノミネートされなかったが、Sarah Snookが演劇部門の主演女優賞を受賞した“The Picture of Dorian Gray”、2023年の演劇新作作品賞と演劇主演女優賞を獲った“Prima Facie”も一人芝居であり、ワンマン・ワンウーマンショーが一つのトレンドにもなっている。演劇の主演男優賞⁷は前述のアンドリュー・スコットが大本命視されていたが、蓋を開けるとマーク・ゲイティスであった。往年のジョン・ギールグッドを彷彿とさせるマーク・ゲイティスの円熟した演技についての評価は高かったが、一人8役で老若男女を演じ分けたアンドリュー・スコットのほうが話題性があり、受賞を確実視されていたため意外な受賞結果となった感是否めない。アンドリュー・スコットは2020年に“Present Laughter”で主演賞を受賞済みであるのに対し、マーク・ゲイティスは助演男優賞のみという配慮もあったと思うが、Sarah Snookが“The Picture of Dorian Gray”で一人26役を演じるという圧巻のパフォーマンスを行っていたことによって、スコットの8役のインパクトが薄れたということが大きく影響し

たように思う。

もう一つ “Best New Entertainment or Comedy Play (新エンタテインメントまたはコメディ演劇賞)” というカテゴリーがあり、“Stranger Things: The First Shadow” が受賞した。これはアメリカの大人気ドラマ「ストレンジャー・シングス 未知の世界」のオリジナルストーリーによる舞台版で、原作のSFホラーの世界を見事に舞台化したことにより人気作となっている。すでにこの作品も2025年にブロードウェイ進出が決定しているところである。

4. 2024年春に見られた話題舞台、先進舞台および劇場の紹介

今回、筆者がウエストエンドを訪問したのは現地時間で2024年2月27日から3月7日で、2024年のオリビエ賞選考締め切りが2月27日だったため、いくつかの受賞・ノミネート作品をタイムリーに見ることができた。また滞在日数が限られていたことから諦めた作品も数知れなかったが、それでも劇場前の賑わいや観劇時の観客たちとの会話なども含め、人気作を現地で体感できたのは大きかった。

本稿では観劇した作品とシアターツアーの内容を紹介することで、ウエストエンドのトレンドを詳らかにしたい。

4.1 ウェストエンドでの観劇報告

今回ウエストエンドで観劇した舞台について紹介する。紹介順は2024年2月27日から3月6日までの滞在期間の観劇順である。

4.1.1 Playhouse Theatre “Cabaret (キャバレー)” musical

このプロダクションは2022年のオリビエ賞で7部門を受賞しており、2024年4月にブロードウェイ版が開始される⁸というまさにホットな作品だった。

劇場に到着するのに時間がかかった。というのも予約したチケットにはPlayhouse Theatreとあったのだが、劇中のKit Kat Clubになぞって劇場表示自体がKit Kat Clubに変更、スマートフォンの地図表示はPlayhouse Theatreなのだが、通行人の認識はKit Kat Clubでエンバンクメント駅から道を尋ねてもなかなか分かる人がいなかった。最終的に理解している人が案内してくれ事なきを得たが、思わぬハプニングだった。

劇場の仕掛け自体がまた興味深かった。劇場名自体を劇中の舞台であるKit Kat Clubとして表示、入る段階からクラブのような入店チェックがあり、服装などを形式的にはあるがじろじろと見られてOKをもらうということになっている(図2)。

2時間前から入場が可能で、早い時間帯はロビー留めになるため劇場内には入れないのだが、場内に設けられた数々のバーでお酒を楽しめる趣向となっている。日本の劇場でもバーカウンターはあるが、ペットボトルを持ち込んだり、まずは劇場街でお茶してから劇場に入ったりと

いう人が圧倒的に多く、あまり利用する人がいないイメージがある。イギリスの劇場はオペラハウスのような大劇場であっても日本の商業劇場と比べて客席のシートの前後幅が非常に狭くなっていて、誰か着席してしまうとその前は通ることができないため、都度席を立てて通れるようにする必要がある。そのためか慣れている人はバーカウンターで何かを飲んで開演を待っていて、5分前のベルが鳴ると一斉に入っていく着席していくパターンが多い。そのためバーカウンターには人が殺到していて、注文



図2 Kit Kat Clubの正面（筆者撮影）

するのも大変だったりする。しかもアルコール2杯の金額がほぼ1杯と変わらないような金額設定になっていたりして、飲ませる仕掛けになっている。Playhouse Theatreは世界的な劇場会社であるAmbassador Theatre Group（以下ATGと略す）下にあるのだが、ATGはこのところドリンクやミールクーポン付きのチケット販売を行うようになってきている。座席の値段が日本よりも細かく分類されており、例えばインターネット予約の際に前の席は座席のみに対して、斜め後ろの席はアルコールとスナック付きでほぼ同価格などという設定がされており、売れ残りやすい席にバウチャー（引換券）を付けることで満遍なく座席を販売することに成功しているようだ。そういうこともあり、滞在中ATG傘下の劇場は特にバーカウンターの稼働率が高いように感じた。

本作の観客席1階前方は、クラブのテーブル席に見立てられており、実際ドリンクテーブルがついているため、お酒を飲みながら見られるという趣向になっている。筆者もバウチャー付きチケットを予約したところ、アルコール2杯と軽食が自動的に劇場内3階のGreen Barのバーカウンター席に用意されていて、行き来が大変だった。日本であれば1階席を予約したらそこに一番近いバーカウンターを割り振ったりしてくれそうなものだが、そのあたりのホスピタリティはないようだ。作品の内容にちなんだオリジナルカクテルなどがオーダー可能で、カクテルグラスで提供されるものをそのまま座席に持ち込むことができ、飲み終わったらそのまま座席のテーブルに置いておいてよいということで、日本とのマナーの違いに戸惑い、本当にそうしてよいのか何度も確認してしまった。筆者は気にならなかったが、会場全体がアルコールの匂いで充満していたのは事実で、アルコールの匂いすらNGという人には本プロジェクトの舞台鑑賞は難しいかもしれない。

1時間前になるとエントランスや通路で軟体パフォーマンスやクラリネットなど様々なパフォーマンスが目の前で繰り広げられるということもあり、それもドリンクカウンターの繁盛に一役買っていた。

劇場の仕様は直径6mほどの円形舞台となっており、3層の蛇の目廻しが可能。舞台上方のバルコニー左右に分かれてオーケストラ。ウエストエンドの劇場は日本の同キャパシティの劇

場と比較して、ステージ幅も客席も狭いことが多いが、この狭さを生かして濃厚な舞台を作り上げる技術は素晴らしい。1階前方テーブル席の最後方につながる入場用の通路がスタンバイになっていて、通路横席だった筆者は普段見ることのあまりない演者のスタンバイ風景を思いがけず満喫できた。

演出のRebecca Frecknallはウエストエンド小劇場として数々の意欲的な作品を世に送り出しているアルメイダ・シアターの現・副芸術監督である。2023年“A Streetcar Named Desire”の演出でオリビエ賞にノミネート、本作の演出でオリビエ賞を受賞している今を時めく演出家である。今まではミュージカル「シカゴ」のようにセクシーで際どい衣装であったり、盛り上げるパフォーマーもグラマラスな女性ばかりであったりということが多かったこの作品において、ショーガールの半数を男性に割り振り、衣装も露出度を抑さえたパステルカラーをふんだんに使用したものとし、ドリーミーかつアグレッシブな世界観を生み出していたのが素晴らしかった。小さな円形舞台も三層の蛇の目廻しになっており、その仕掛けを存分に生かして舞台を実際より大きく見せるなど彼女のセンスが存分に光る舞台だった。

エムシー役のJake Shearsは元ザザー・シスターズのボーカルで、イギリスではよく知られた歌手、ブロードウェイミュージカル“Kinky Boots”でも活躍していた実力者である。プロフィール写真がグラムロックの中性的化粧を施したもののため、エムシーの役の時はずぐわかったのだが、その衣装と化粧を脱ぎ捨てて出てきたときハンサムすぎて認識できなかった。ものすごくトレーニングされた均整の取れた体でアクロバティックな動きをしつつ、かつ見事な歌声を披露、冒頭から引き込まれた。

サリー・ボウルズ役はRebecca Lucy Taylor、Self Esteemの名前で音楽活動をしており、2023年の新作演劇作品賞を獲った“Prima Facie”の曲を手掛けるなどマルチな才能を発揮している。そんな彼女がこれまでのキャリアの通称ではなく本名で演者に挑戦したことが話題になっていた。これまで小さくて愛らしい女性をキャスティングすることが多かったこの役に、大柄で肉付き良い彼女がずばり嵌った。彼女自身クイアを自認しているそうだが、かわいくてお馬鹿で……という従来のサリー・ボウルズ像を一転、強くて自由という新解釈になっていた。若干セリフの声が小さいところはあったのだが、とにかく歌が素晴らしい。‘Don’t tell mama’から‘Mein herr’、前曲ではコミカルに楽しく踊りながら歌いつつ、後曲では強弱を自在につけボルテージを上げていく圧巻のパフォーマンス。最後の‘Cabaret’、心身ともにボロボロになった役の状態で、か弱く音程を外しながら歌いつつ、徐々にヒートアップしてクレイジーにパワフルに絶唱していくパフォーマンスに、目の肥えた客席からも拍手喝采で、歓声がどっと沸いた。

シュナイダー役のBeverley Kleinも「ジブシー」でも通用するような自在で豊かな歌声、シュルツ役のTeddy Kempnerは、「屋根の上のバイオリン弾き」のティビエに見える外見ながら愛らしく優しく、このカップルを見ているだけで楽しく感じていたのが、後半の非情な成り行きに、物語と知りながら怒りを禁じえなくなった。観客たちが目撃者的に配置されていて、どんどん世界観に引き込まれていく魔法のような舞台であった。この素晴らしい劇場、最高のキャ

スト・スタッフで、カンダー&エブの傑作を見られた幸せをいつまでもしみじみと感じていたと思わずにいらなかった。

ウエストエンドでは3月中旬から約3か月サリー役としてCara Delevingneが、本プロジェクトのブロードウェイ版では2024年10月現在エムシー役としてAdam Lambertが出演しており、当分話題の舞台として観客を集めそうである。

4.1.2 Sam Wanamaker Playhouse

“The Duchess of Malfi (モルフィ公爵夫人)” play

Shakespeare's Globeはテムズ川沿いのバンクサイドと呼ばれる地域にあり、Globe TheatreとSam Wanamaker Playhouseの2劇場を備えている。Globe Theatreはエリザベス朝の時代の劇場をほぼ同じ場所に再建築したものである。再建築運動の筆頭となったのがオペラやシェイクスピア作品の演出で名高いSam Wanamakerであり、その功績を記念して小劇場には彼の名前が付けられている。Globe Theatreはシェイクスピアの時代のままの再建のため、着席座席部分にはドーナツ状の屋根があるものの吹き曝しのため、極寒期間である1月から4月の間は原則上演がなされない。そのためGlobe Theatreのプロダクションは見られなかった。

Sam Wanamaker Playhouseは353席の小さな劇場である。“The Duchess of Malfi”はジョン・ウェブスターによる復讐悲劇で、残虐な内容もあってか日本ではあまり上演されることがないということもあり、見られるのを楽しみにしていた作品であった。



図3 蝋燭の補充 (筆者撮影)

主人公の公爵夫人にFrancesca Mills、彼女は小人症というハンディキャップをものともせずNETFLIXの「ウィッチャー 血の起源」などTVや英国の舞台で活躍している。この戯曲については読んだことしかなく、公爵夫人はメロドラマティックに振り回されてよめく女性というイメージだったが、今回の演出では自立した女性として描かれ、前半かなり明るくはきはきと演じており、喜劇的でした。後半から戯曲の残虐性が増していき、強い彼女でさえどうにもならず、悲劇に巻き

込まれていくところからは畳みかけるようなテンポになる。最後、絞首で殺されるところを正面から見せ、あまりにリアルな死にざまに寒気がしたほどである。小劇場ゆえに犯罪現場に巻き込まれたかのような臨場感あふれるシーンであった。

この劇場もかなり小さく、舞台は8mほどで日本の小劇場くらいの大きさである。今回非常

に興味深かったのは照明で、基本電気照明は使用せず、キャンドルで照明演出を行っていた。キャンドルは独特の匂いがあり、この燃える音と匂いが何ともノスタルジックであった。途中照明が溶暗していく場面では、キャストたちがピンスポット代わりに手に持った燭台から一つ一つキャンドルを消していき、キャンドルがすべて消えてしまった「闇」の中で芝居が続くという演出もあったが臨場感が増し、面白かった。余談だが消してしまったキャンドルをどうするのかと思っていたら、幕間に担当者が一つ一つ手で点灯していた。その様子が図3である。

また舞台上方に演奏席があり、そこからミュージシャンが見下ろしながら効果音をつけていくというのも面白かった。加えて今回はプロジェクターで全台詞を投影していた。エリザベス朝の英語は現在の英語とはやはり大きく違うため、ヒアリングに困るのだそうだ。日本人が歌舞伎を見て、慣れていないと言葉をすぐに理解できないのに近いらしい。すべて完璧に分かったわけではないがそれでもすべてのセリフが映されるので誰がおおよそ何を言っているのか見当つくというのは旅行者としてはありがたかった。聴覚障害の人にも楽しめるユニバーサル演劇であるところが演劇先進国ならではの感じた。またただ文字を投影するだけではなく、文字が花になったり、暴力シーンでは投影した台詞が降ってきたりなどという演出が、キャンドル照明のほの暗さと合わさって、演出効果をあげていた。歌舞伎に翻案したら非常にマッチしそうな作品である。

4. 1. 3 Theatre Royal Haymarket

“The Picture of Dorian Gray (ドリアン・グレイの肖像)” play

今回一番気になっていた作品が“The Picture of Dorian Gray”である。あまり宣伝をしておらず情報を掘り上げるのに苦労した。それもそのはず、連日満席でチケットがなく、宣伝もしていないという状態だった。個人的にはそれまで主演のSarah Snookについてはアメリカのテレビドラマで人気が出つつあるオーストラリア出身の女優ということしか把握しておらず、彼女が見たいというよりはあまりにチケットが買えないので意地になって繰り返しチェックして出てきた空席を購入したわけである。とにかく直近の演劇評がことごとく5つ星を連発しているのも気になった。イギリスの場合、演劇評は1から5までの星付けで評価されるため分かりやすい。3つ星であれば合格点、4つ星であればかなりいい評価で、“Spirited Away (千と千尋の神隠し)”は日本語上演にもかかわらずほぼ4つ星で高く評価されていると感じたものである。5つ星ばかりというのはまさに奇跡的で、見逃すべきではない作品ということになる。チケットを予約してから、期待は高まる一方だった。

とにかく一言、2時間怒濤の凄まじい作品だった。劇場に入ると、ブルーライトの中、舞台上には絵のないカンバスが下りている。定刻になるとカンバスと思っていたスクリーンに黒いブラウスで拵えをしていない状態のSarah Snookが映し出され、落語のように一人語りで主要キャストのドリアンやヘンリー、バジルになって演じていく。スクリーンに映像投影されているだけかと思いきや、セリフがとても生々しく、ステージ後方で一人語りしている彼女をライ



図4 五つ星とスクリーン（筆者撮影）

ブ上映しているということが分かった。かなり前方の可視性が悪いと注釈付きの席に座っていたため、後方があまり見えず気が付いたのが遅かったわけである。とにかく驚いたのは、主演女優の前を平気でカメラマンが立って映像を撮影するというスタイルである。全部で5つのスクリーン（図4）が自在に動いて組み合わせり、投影されるため、演技の様子は分かるのだが、演者の前に裏方が立ってその姿を遮るというのは演劇従事者にとっては驚きなのではないだろうか。

素の Sarah Snook に徐々にウィッグや衣装が施され、その早変わりもすべて見せる。一人26役の内訳として、舞台上で演じるのは基本前出のドリアン、バジル、ヘンリーの3人であとの23役は撮影済みの映像なのだが、その映像と相対して演技していくわけである。秒刻みとでもいうべきスピードで場面が転換していき、5つあるスクリーンにすべて違うキャラクターが投影される場合には、それぞれに向かって語り掛け

ていくことになる、何番目のスクリーンにどの役の自分が写っているかということ把握して演じる必要があるのだ。しかも相手が自分とはいえ映像のため、待ってくれたり合わせてくれたりということがないため、一瞬の遅れや度忘れがあると目も当てられないことになるという綱渡り的な芸でもあった。最初スクリーンをキャンバスと勝手に思い込んでいたわけだが、ドリアンの肖像については演者がスマホで撮影した映像をその場でスクリーン投影、そのままその画像をスマホ操作で映像加工して醜くするという演出もあった。近年の加工やルッキズムを揶揄するような演出で劇場内は大いに盛り上がった。長いセリフばかりだが全く噛んでいなかったように思う。決められた位置に立ち、決まったタイミングで振り向いて、そこにコミカルであったり怒りであったり感情を乗せていく。マシンガンのような早口でまくしたて、縦横無尽に舞台上を走りながら2時間ノンストップで舞台が進んでいくのは魔法のようでもあった。終演後は熱狂的なスタンディングオベーションが起こった。

演出はこれまたオーストラリア出身の Kip Williams でオーストラリアではシェイクスピアやブレヒト、オペラなどで着実にキャリアを積んでいる演出家である。ブロードウェイが見逃さないと思いきや、2025年3月に同じく Sarah Snook 主演でブロードウェイ上演が予定されているとのこと。彼はこれからウエストエンド、ブロードウェイで人気になりそうな勢いがある。この作品、ブロードウェイでも当然高く評価されると思うが、ワイルドの本国イギリスでこれだけ評価されるということに意味があるような気もする。オリビエ賞の衣装デザイン賞を受賞した Marg Horwell のコスチュームはカラフルでビビッド、世界観にピタリとはまっていた。演

者も大変だが、撮影者もスイッチャーも舞台監督も目まぐるしくて大変だろうなと思うことしきりでもあった。

Sarah Snookは前述したように結果として後日オリビエ賞の主演女優賞を獲得、舞台の人気と評価がハイレベルで合致したことになる。ミュージカルのようなロングラン作品であれば、受賞後にゆっくり見られるがこのプロダクションは14週限定で受賞後にはすでに終わっており、演劇に関しては評価が下される前に見ておかないと後悔するということを痛感した。

4.1.4 Victoria Palace Theatre “Hamilton (ハミルトン)” musical

リン＝マニュエル・ミランダが作詞、作曲、脚本を手掛け、2015年の初演時にはタイトルロールも務めた傑作で、ミュージカルファンの間では日本上演が待望されている“Hamilton”。Disney+で映像配信されているとはいえ、劇場で体験したかった作品である。

“Les Misérables: The Staged Concert”でエポニーヌ役に抜擢され、一躍有名になったShan Akoがイライザ・ハミルトンで出演しているというのも見たくなった理由の一つである。実力主義のブロードウェイ、ウエストエンドでは経験が少なくても大抜擢されることが多々あり、そこでスターになるとまた別のプロダクションから声がかかるようだ。エポニーヌの映像では強く歌い上げるような様子が印象的だったが、こちらでは役柄もあって華やかな存在感の中にしっとりと歌い上げていた。主演のハミルトン役にはまだ演劇学校を卒業して4年ほどのキャリアの浅いDeclan Spaineが抜擢されていた。これもウエストエンドドリームだろう。さすがに歌はうまいし、ハンサムで、お人好しで周りに甘やかされてという解釈的な演技方で面白かった。

狂言回しの役割のアーロン・バー役のSimon-Anthony Rhodenは“Kinky Boot”のローラ役などですでに実績があり、安定感があって安心して見られた。アンジェリーナ・スカイラー役のGeorgina Onuorahはアンドリュー・ロイド・ウェバーのスカラシップを受け、彼の“Cinderella”でCarrie Hope Fletcherの代役を務めていたとのこと。一際ぐんと響く歌声の持ち主で観客を魅了した。今後の活躍が楽しみである。

曲数がリプライズ有とはいえ40曲以上あり、シームレスに場面が怒濤の勢いで進んでいく。セットの大きな転換はなく（図5）、演者が机や椅子などの道具を運び込み撤去、作り付けの階段を移動させながら、その間を歌と踊りで繋いでいくという形である。基本的には主役含め全員ステージの上において、演じていないときにはアンサンブルに加わる形を取っていた。“A Chorus Line”同様の演出形式とでも言うべきか、これは役者の負担も大きいと思う。とにかくイントロのタイトルソングや‘My shot’など聞いたことのある名曲満載で、聞いているだけでも楽しく、わくわくする作品であり、スピーディーであつという間の2時間40分である。ただやはり内容がアメリカ建国期の政治物で、一定の歴史の知識がないと楽しみが薄れる部分がある。歴史もののミュージカルと言えば2025年1月に“SIX”の来日公演と日本キャスト版公演が決まっている。ヘンリー8世の有名な6人の妻を現代の歌姫のイメージに当てた、ミュージカ

ルというよりコンサート風のエンターテイメント作品だが、チューダー王朝の歴史的背景理解の必要があることから輸入は難しいと思っていたので意外だったが、楽曲はポップチューン中心で出演者6人とコンパクトな作品構成であり、製作しやすかったというのものもあるかもしれない。

“Hamilton”の楽曲がヒップホップやR&Bなどということもあり、「レ・ミゼラブル」や「オペラ座の怪人」などクラシカルな歌唱ミュージカルが好まれる日本では若干聴衆を選ぶのではないかと。出演人数も多く、まだ日本での上演は難しいのではないかと。思う。

ウエストエンド上演のプロデューサーにはキャメロン・マッキントッシュが加わっており、健在ぶりを示している。上演されているVictoria Palace TheatreはDelfont Mackintosh Theatresの系列である。



図5 Hamiltonのセット（筆者撮影）

4.1.5 Apollo Victoria Theatre “Wicked (ウィキッド)” musical

“Wicked”は2003年にブロードウェイで初演されて以来、ウエストエンドはもちろん日本を含む世界各国で上演されている人気のミュージカルである。2024年11月に、トニー賞のミュージカル主演女優賞を受賞しているシンシア・エリヴォがエルファバ、アリアナ・グランデがグリンドラという配役でユニバーサル⁹から2部制の第1部がアメリカで映画公開されている話題作である。日本では劇団四季が2024年10月現在大阪で上演を行っている。

ブロードウェイ初演時のエルファバがイディナ・メンゼル、グリンドラがクリスティン・チェノウェスとブロードウェイミュージカルを代表する歌い手で、特にチェノウェスを想定して書かれたというグリンドラの役はオペラのソプラノ発声で歌う場面があり技量を要する。またこのミュージカルを代表する楽曲‘Defying Gravity’については、力強いハイトーン連続の難曲で第1幕を締めくくるにふさわしく、この曲を活かすべく映画版は第1幕を第1部、第2幕を第2部とする構成にしたようである¹⁰。本曲はThe Standardに以前The hardest musical theatre songs to sing（最も歌唱が難しいミュージカル曲）¹¹の筆頭に挙げられていた曲でもある。

今回見たかったのはグリンドラ役のLucy St. Luisである。“Motown: The Musical”でダイアナ・ロスを演じて注目されていたが、「オペラ座の怪人」のクリスティーヌ・ダーエ役をはじめて黒人として抜擢されたことが世界的に話題となり¹²、以後London Theatre Guideなどでもスターとして扱われていて、一度彼女の歌を聞いてみたかった。ホイットニー・ヒューストンのルッ

クスに、チャノウェスの歌声とコメディセンスを併せ持つといった感じの華あり実力ありのまさにスターといった感じで、今後の活躍が楽しみである。彼女の歌う‘Defying Gravity’も聞いてみたかった気がする。

エルファバ役の Alexia Khadime は「ライオンキング」のナラ役で注目され、2008 年から何度もエルファバを演じてきた実力者である。エルファバとグリンドが二人とも黒人というキャス



図 6 “Wicked” 終演後の賑わい（筆者撮影）

ティングは初めてで、こちらも話題となっていた。歌声は本当に素晴らしく、声量といいボルテージの上げ方といいオリジナルキャストのイディナ・メンゼル以上かもしれないと思わせるほど。期待していた以上に大迫力の‘Defying Gravity’で場内は第 1 幕にもかかわらずスタンディングオベーションとなった。この両キャストの力量が同格で、だからこそ歌も演技も相乗効果でより素晴らしく感じる事ができた。二人とも圧巻の歌声なのだが、絶唱では

なく余裕ある朗々とした声で本当に見事だった。連日このレベルを二人で維持しているからこそウエストエンドのトップショーなのだと思う。劇場内の装飾もグリーン尽くしで手が込んでいて、とにかくいっただけで楽しい。夢のような 3 時間だった（図 6）。

4. 1. 6 London Coliseum “The Magic Flute（魔笛）” opera

ウエストエンドでは Royal Opera House と England National Opera でオペラを見ることができ、England National Opera の方がカジュアルでチケットの価格も抑えられている。“Spirited Away” の上演劇場として知られるようになった London Coliseum は England National Opera（以下 ENO と略す）の本拠地である。

今回見た “The Magic Flute” は ENO 独自の演出でレパートリー化している人気作である。ENO オペラは基本英語で上演、その上、英語字幕がつく。これが驚くほど見やすく聞きやすかった。オペラ鑑賞する場合、イタリア語、ドイツ語、フランス語という語学の壁があるが、この障害がないだけでぐっと身近に楽しむことができる。

今回の配役は、タミーノに Norman Reinhardt、ハンサムで王道のテノール。パミーナに Sarah Tynan、彼女はとても正確で力強くきれいなソプラノだった。パパゲーノに David Stout、コミカルな演技と豊かなバリトンでたちまち魅了された。英国でも指折りの人気バリトン歌手のように彼が出てくると観客の拍手はひととき大きかった。ザラストロ役の John Relyea の低音はため

息が出るほど素晴らしい。夜の女王役の Rainelle Krause は、ENO でこの役でデビューし絶賛されたということもあり、彼女目当ての観客も非常に多かった。もちろん圧巻の歌声であった。

楽曲の素晴らしさにふさわしい歌い手を集めているだけではなく、とにかくこのプロジェクトは、演出が実に面白いのである。チョークアーティストが登場して書いた文字や図を紗幕に



図7 チョークアートと鉄板（筆者撮影）

投影、役名を即時に入れたり矢印入れたりとか大活躍するのである。また、舞台上に大きい鉄板がワイヤー吊りで置かれており（図7）、後ろだけ吊り上げて開帳場にしたり、6メートルほど釣り上げて鉄板の下側に仕込まれたライトの光が降り注ぐ演出にしたり、70センチほど吊りあげて机に見立てたりと英語がわからなくても見ているだけで面白い。しかも ENO では Under21、すなわち 20 歳以下は無料で観劇できる制度を設けていて、羨ましいことしきりだった。

この素晴らしい演出をしたのは誰かと調べたところ、オペラも演劇も手掛ける演出家 Simon McBurney で、彼は TV や映画でも活躍する役者かつ脚本も手掛けるという多彩な人物であった。あと指揮者が小柄で日本人のように見え、気になってチェックしたところ、ドイツを拠点に幅広く活躍している Erina Yashima だった。彼女の活躍を見られたのもとてもうれしかった。

4.1.7 The Bridge Theatre

“Guys & Dolls（ガイズ・アンド・ドールズ）” musical

The Bridge Theatre は 2017 年にニコラス・ハイトナーとニック・スターによって設立された劇場である。ナショナル・シアター・ライブでもこれまで数多くこの劇場の作品が紹介されていて、新作と古典をバランスよく上演し、かつ常に話題の舞台を提供している。新しく加わった劇場でありながら、すでにウエストエンドの一角を担っていると言える。

やはり注目は、ニコラス・ハイトナーが生み出す作品群である。“Julius Caesar” や “A Midsummer Night’s Dream” のような古典もフィリップ・ブルマンの小説を脚色した “The Book of Dust: La Belle Sauvage”、デビッド・ヘアの “Straight Line Crazy” など幅広い演目を一定以上の水準で提供してきた。中でも今回見た “Guys and Dolls” は本当に素晴らしかった。結果として 2024 年のオリビエ賞の主要な部門に数々ノミネートされ、一部門しか受賞できなかったのが不思議なくらいである。

独自のセリ機構を活用した演出を体験できるのが、この劇場の特色である。ステージを観客

が囲むスラスト・ステージ型で、そのステージの中にも観客を入れ、昇降するセリの上で演ずる役者をスタンディングで追うように観劇するイマーシブな体験ができるのである。観客がスタンバイしている時点での床より、セリ下がることはなく、奈落に落ちるというようなことはない。またセリ近くの観客が巻き込まれないよう、警備員風の格好をしたクルーが警備員風に指示を出して整理するという面白さ。非常にうまく誘導していたが、それでも日本では危険と



図8 セリにスタンバイする観客（筆者撮影）

されて実現しない演出だろうと思う。またステージに入る観客用の荷物ロッカーもあり、手ぶらでステージに参加することができるようになっていた。“Julius Caesar”の時はスタンディング客が民衆に見立てられていたが、今回はダイナーの客やショーの観客と場面場面で違う役割があって面白かった。第1幕の後休憩があり、第2幕に備えて早く戻ってきたスタンディング客は希望するとダイナーの席の客役で座らせてもらえるというサービスもあり、少々羨ましくも感じた（図8）。

ネイサン役のOwain Arthurは“One Man Two Guvnors”や“The History Boys”の舞台に出演してきた、いわばニコラス・ハイトナー組とでもいうべき役者で、観客の拍手もひととき大きかった。コミカルで非常に歌が上手く、今後ミュージカル出演が増えそうだ。アデレード役はTimmika Ramsay、「ムーラン・ルージュ」のラ・ショコラ役からの横スライド出演、ちょっと太めのアフリカ系アクターで歌声愛嬌共に抜群。この二人の‘Sue Me’のバランスもとてもよかった。スカイ役のGeorge Ioannidesは、ブラッドリー・クーパー似のラテン系ハンサムでとても華がある。サラ役Celine Schoenmakerは「レ・ミゼラブル」ファンテーヌや「オペラ座の怪人」クリスティーヌを務めてきた実力者。お堅い美人という感じで、このカップルの立ち姿だけでもポスターを切り抜いたように出来上がっているのだが、二人とも当然歌や踊りが上手く、見ていて飽きない。ナイスリー・ナイスリー・ジョンソン役はJonathan Andrew Hume。「カム フロム アウェイ」のケビンJ役で高い評価を得たばかりで、「ライオンキング」のシンバ役経験もある実力者。‘Sit Down, You’re Rockin’ the Boat’、期待にたがわず大迫力だったのだが、これを3回繰り返して、最後にものすごいボルテージでクローズするには驚かされた。1回目だけで十分満足だったが、3回も聞けてラストの迫力は全身に響いて染み入る、大げさでなく奇跡の体験という感じであった。

実力派キャスト故、ミュージカルとしてすでに十分に面白いのだが、ここに自由自在なセリ機構を交えたセットの魅力が加わる。上からの吊パネルや電飾で場面転換を示し、これをセリの上下と同時に行う。加えてダイナーやバーにするためバーカウンターやダイナーテーブルを

セットして片付けて……というスタッフがいたが、普通の舞台と違って四方をスタンディング客に囲まれているわけで、隙を見つけて要領よく片付けるプロの様子に、この部分だけクローズアップしても十分ショーとして見られるのではと感心した。2階席バルコニーの真下にぐるりとオレンジ・ピンク・赤の電球が設置されていて、電飾風に動くのがノスタルジックでミュージカルの時代背景にとってもよくマッチしていた。

スラスト・ステージ故、チケット購入時、どの席で押さえるのが一番見やすいか分からずかなり悩んだ。そこはさすがにニコラス・ハイトナー、役者が本当に少しずつ動きながら死角がないようになっていて見え方に全く不満はなかった。

また終演後はクラブ化して踊ることができるという楽しい演出あり。ただしディスコ化するステージにはスタンディング客しか入れないため、いつかはこの劇場のスタンディング席に挑戦したいと思いながら劇場を後にした。

4.1.8 Sondheim Theatre “Les Misérables (レ・ミゼラブル)” musical

ウエストエンドの象徴的中心地、Sondheim Theatreへ（図9）。“Les Misérables”はこの劇場がQueen’s Theatre名であった2004年からこの劇場でロングランを続けており、2019年にスティーブン・ソンドハイムにあやかって改称した。ちょうど1ヶ月限定でスウェーデンの人気歌手Peter Jöbackがジャン・バルジャンを務めていた。スカンジナビアにおけるトリプルミリオンセールス歌手で、スカンジナビア域およびウエストエンドでは数々のミュージカル主演経験があり、ウエストエンドとブロードウェイで「オペラ座の怪人」のタイトルロールを務めたとのことで、どんな表現をするのか楽しみにしていた。序盤‘Work Song’、Took my flight!の歌い上げ、舞台を縦横に走りながら一気に音階を下げて響かせるという離れ業を見せ、目の肥えている観客をあっという間に自分の世界に引き込む。高音の伸びと声量が特に素晴らしく非常に繊細でナイーブな表現をする。‘One Day More’は華やかに力強く、‘Bring Him Home’は彼の持ち味が存分に生かされ柔らかく、と表現力に幅があり実に見事だった。2025年夏に日本で上演が予定されている「ミュージカル『レ・ミゼラブル』ステージド コンサート」のキャストにも入っているとのことで、もしかしたら日本でこの美声を聞くことができるかもしれない。

相対するジャベール役のStewart Clarkeはとてもハンサムだが終始無



図9 Sondheim Theatre（筆者撮影）

表情で大柄なため終始憎らしい。歌声も力強く正確でそのイメージに拍車をかけるが、最後のモノログのところになるとがらりと人間味が出て惹きつけられる。バルジャンとジャベールの力量が均衡していないと面白くないわけで、その意味ではとてもバランスが良かった。最後のアンコールでバルジャンとジャベールがにこやかに仲良くしているのを見られるのもまたショーとして楽しい。

エポニーヌはウエストエンドデビューの *Amena El-Kindy*。第二のサマンサ・バークスになりそうなスター性がある。エキゾチックなルックス、パワフルで豊かな声量、コーラスでの低音も豊かで美しい。ティナルディエ夫人がオリビエノミネート経験のある *Claire Machin* で歌は巧みだしコミカルなセンスも抜群。ティナルディエがTVのホスト番組をもつイギリスでは人気の *Luke Kemper*、整った顔立ちなのだが、敢えて意地汚しさとか嫌らしさをオーバーに演じることでハンサムに見えないようにしていた。コゼットが *Lulu-Mae Pears* でまだ学校を出たばかり、デュエットでソプラノを抑えたボリュウムで聞かせるなど技術がありうまいと感じた。マリウスは *Will Callan*、この役でウエストエンドデビューしており、シンガーソングライターとしても活躍している。正統派ハンサムで、カップルバランスがとてもよい。アルジョラスが代役で *Ben Culleton*。一見マリウスかと思うような金髪のハンサムで華やか。ファンテーヌも代役で *Ellie Ann Lowe*、背が高く美人でももちろん歌は上手い。このレベルで代役というのもまたウエストエンドの厳しさなのかと思う。

それにしても舞台の間口は日本の上演劇場よりかなり狭く、アンサンブルが溢れてくるように見え、またオーケストラピットも狭いため、前方席だと日本より間近で見られて感動する。

4.1.9 Palace Theatre

“Harry Potter and the Cursed Child Part one Part two

(ハリー・ポッターと呪いの子)” play

日本でも赤坂ACTシアターで上演中の作品であるが、日本版はウエストエンドの2部制から短縮して1部制となっている。ウエストエンド版は第1部、第2部合わせて約6時間、日本版は約3時間40分の上演時間である。

ウエストエンドでは第1部をマチネ、第2部をソワレで上演し、基本的に1日で第1部と第2部を観劇するチケット販売の形を取っている¹³。

Palace Theatreは今回唯一訪問できたNimax Theatres系列の劇場である(図10)。入場の荷物チェックが他劇場より厳重だが、エントランスドアまでの誘導案内の掲示が見やすく、トイレの数が他劇場より圧倒的に多いなど、ホスピタリティが高いように思う。ちなみに2004年にQueens Theatre(現Sondheim Theatre)に移動するまでは“Les Misérables”上演劇場であった。

初演時にハーマイオニー役を黒人にしたことでもかなり話題になったが、そのほかの主要キャストは基本映画のキャラクターのイメージを踏まえたキャスティングをしており、映画を見ている人は小説の世界から19年後のハリーやロン、ドラコがすぐ理解できる。ハリー役のDavid

Ricardo-Pearceはとてもハンサムでイメージ通りに年を重ねて魅力を増した感じだし、ロン役のThomas Aldridgeは幸せ太りでハーマイオニーに振り回されるというキャラクターを好演していた。ハーマイオニー役は代役でJemma Geanaus、ミュージカルでも活躍する女優で、歌手活動や演出業にも進出しているとのことで役柄にぴったりのクレバーな才媛という感じで、全く違和感がなかった。ジニー役のPolly Frameは最近TVドラマでの活躍が目覚ましいが、夫と子を支える芯の強い女性という感じでイメージ通りだった。

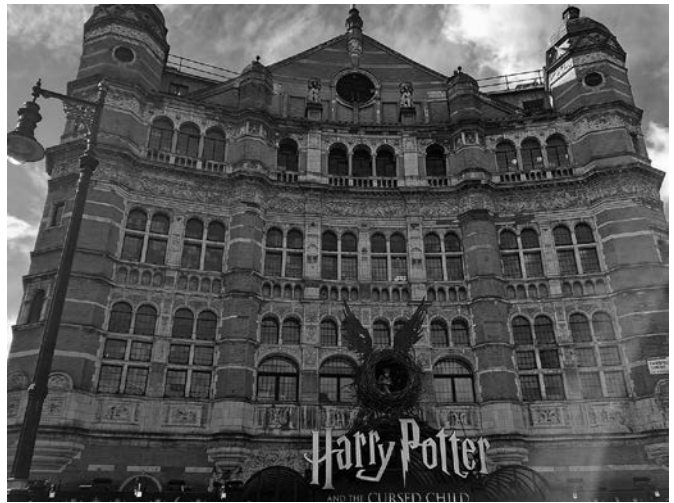


図10 Palace Theatre（筆者撮影）

呪いの子・アルバス役は代役でKelton Hoyland、純粹で不安定な難役を好演していた。ドラコの子・スコーピウス役のHarry Acklowe、コメディセンスがあり、歌舞伎の海老反りのような動きをするなどアクロバティックな身体能力が突出していて今後が楽しみである。アルバスが主人公だが、いわゆる辛抱役なのでスコーピウスのほうが見せ場は多くおいしい役のような気がした。マートル役のClancy Ryanは、浮遊感演出のために高い位置に設置された鉄の輪をぐるぐると座りながら回り続け、ほぼ止まることなく、拍手をさらった。組み分け帽子役のChris Jarmanがハグリッドを兼ねる。組み分け帽子の演出が、帽子を持って高く掲げて振りながら声を当てるだけという古典的なもので逆に面白かった。舞台で数多く活躍しており、とても響く良い声の持ち主だった。

基本的にウエストエンド上演は映画のイメージに忠実だ。マクゴナガル先生は完全にコピーしているというのではなく、マギー・スミスが演じた時のイントネーションや、髪型や動きなどを観客が期待するイメージ程度に取り入れながら自分風に演ずるという感じだった。フーチー先生とペチュニアおばさん、アンブリッジ先生を演じたのはKathryn Meisleで、どれも映画の特徴をつかんで器用に演じていたのが印象的だった。彼女はブロードウェイ初演時、この3役を演じている。エイモス役もダンブルドア役を兼ねていて、そのビジュアルは映画から抜けてきたよう。絵の中のダンブルドアは投影ではなく、枠付き紗幕越しの演技というこれまた古典技法で楽しかった。David Annenがバーノンおじさんとスネイプ先生とヴォルデモートを演じ分ける¹⁴という離れ業を見せた。見た目もだが、映画のアラン・リックマン的な話し方要素も入っていて劇場が沸いていた。

英語がわからなくても、ハリー・ポッターファンならある程度楽しめるビジュアルや演出に加えて、生きているようなディメンターの仕掛けやフライング、パトローナスの青い火、戦闘

シーンの特殊効果やマトリックス的なパフォーマンスの仕掛け、第2部の第1幕終わり、劇場内全体を使った文字演出など見どころは満載。フライングもあるが、劇場の立端が日本よりかなり高いので、見慣れず、自分がするわけでもないのに怖く感じた。高い可動する階段2つを交差させながら舞台を進めていく演出は、映画の Hogwarts 寮の回廊を思わせて面白い。ハリー・ポッターの世界に没入し、パラレルワールドを楽しむ夢の6時間という感じだった。

4. 1. 10 Royal Opera House

“The Flying Dutchman (さまよえるオランダ人)” opera

英国一の歌劇場 Royal Opera House (以後 ROH と略す) (図11) に行くため、気合を入れてドレスアップして出かける。1階2列目のため指揮者は目の前、Henrik Nanasi というハンガリー出身の人で、ROHでは「トゥーランドット」や「サロメ」など指揮済みとのこと。演出は Tim Albery、「タンホイザー」や「ニーベルングの指環」などイギリス以外にもドイツやスコットランドで広く活躍している様子。今回のセットや演出は、パンフレットや宣伝物に2015年公演の写真が多用されており、ROHの人気演目として定着しつつあるようだった。幕が開くと舞台を埋め尽くす鉄板の開帳場、上下の端が古い羊皮紙のように丸まっているような形状だった。開帳場と思いきやワイヤーで「白浪五人男」の大屋根のあおりのように開き、その裏には LED が仕込まれていて古い船倉になっていてオランダ人の部下たちは再び船倉に閉じ込められるという仕掛け。ENOでも同様の演出があったが、こちらの方が規模は大きいため迫力がある。



図11 Royal Opera House (筆者撮影)

オープニングは舞台の緞帳代わりの水色の幕を下手から強く振ることで波に見立てるという歌舞伎的な演出。オープニング曲が長いため、時々弱くなる波に心の中でエールを送る。その幕に雨の映像を流しながら、その裏から強い灯台の光を合わせる。雨音がリアルだと思ったのだが、本水の生音で、幕が開くと水たまりができていた。今回最先端の舞台を見続けてきたが、こういう古典演出を見ると何かホッとするというか温かい感じがするものだ。照明も非常にシンプルで、ダッチマンの登場を上

手側のサイドスポットだけで浮かび上がらせるなど、効果的で無駄がなく見事だった。

今回のタイトルロールはウェールズ出身のバス・バリトン、CBEである Bryn Terfel で英国はもちろんアメリカの MET などでも活躍しており、モーツァルトからソンドハイムまでこなすそう。近年はワーグナーなどレパートリーの幅を広げていてダッチマンは得意としているようだった。とにかくこの役、歌うパートが多いのに加えて声量が求められる。もちろんそれがオ

ペラなのだが、骨にまで響くような美声で、表現力といい、声量といい身震いするほど素晴らしかった。失礼ながらパンフレットなどで見る Bryn Terfel は正直ちょっとコミカル系な外見で、センタが一目ぼれする役としてどうなのか……とも思ったが、この声の美しさであれば外見は不要とも言おうか、とにかく心に入り込む魔性の声といった感じで全く気にならず、センタの気持ちに同化してだんだんハンサムに見えてくるから不思議である。センタ役の Elisabet Strid はスウェーデン出身でストックホルムやシカゴでキャリアを積んできて今回が ROH デビューとのこと。とても美人でオペラ歌手にしては細いほうだからとても映える。あとダッチマンとのデュエットなど手抜きなく、終盤まで持つのかとハラハラさせられるほど渾身の勢いで歌っていた。デビューで力が入っているというのもあったと思うが、カーテンコールでは拍手喝采で ROH の観客に受け入れられた様子、本人もとても満足そうだった。ダーランドがデンマーク出身のバス Stephen Milling。MET や ROH をはじめ世界中で活躍しており、ROH ではワグナーに定評があるようである。ファンが多いらしく拍手も大きく、センタとダッチマン、ダーランドのトリオもまた本当に素晴らしかった。Miles Mykkanen はアメリカ出身のテノールでピラーマン役。寝転がりながらソロを歌うなど、やはり声量がすごい。ちょっと太めで水たまりの中を転がっていくなどお笑い部門を受け持っているようで好感が持てた。エリック役はイギリス出身のテノール Toby Spence でルックス歌声ともに正統派の美しさ。この作品においてはピラーマンのほうがおいしいのだが、Toby Spence は今後どんどん人気が出てきそうだし、ROH も押している感じ。とにかくこれだけのキャストと仕掛けは日本ではなかなか見られないのではないかなと思う。

4. 1. 11 New Wimbledon Theatre “Player Kings” play

最後の観劇はウエストエンドの生きるレジェンドであるイアン・マッケランの舞台となった。イアン・マッケランは観劇時で 84 歳、“Player Kings” はシェイクスピアの「ヘンリー 4 世」の第 1 部と第 2 部の翻案で、ファルスタッフを演じるということで話題となっていた。

New Wimbledon Theatre は文字通りウインブルドン駅の近くにある ATG 系の劇場である。ロンドン中心地から電車で 30 分以上かかるため、ウエストエンドの劇場にはカウントされない。1910 年にオープンしており、四半世紀前のウエストエンドの劇場の特徴一昔からの重厚感ある内装を維持し、トイレが少なく古い、を有している。ウエストエンド演劇は基本 3 カ月前後のリミテッド上演で、評判が良いと大きな劇場に移って再演というパターンが多いが、さすがにサー・イアン・マッケラン主演の新作ということでプレビュー的にこの劇場で上演し、その後ウエストエンドの Noël Coward Theatre で上演することが決まっていた珍しい作品でもある。ちなみに Noël Coward Theatre は Delfont Mackintosh Theatres 系列、日本では違う劇場系列でプロジェクトが行き来することはないのでその柔軟性も興味深かった。

翻案と演出はロバート・アイク。レンガ調の構成舞台に緞帳代わりと奥の黒幕代わりのアイボリー調の幕を上手下手と自在に動かし、年代と場面情報を示す電光掲示板搭載の黒パネルが

舞台前面に上下する。左右上下の転換が多く複雑ではあるが、場面表示がなされるためさほど混乱はしなかった。全体のトーンとして現代風俗とロック調を取り入れていながら、シェイクスピア時代の歌はカウンターテナーに歌わせるという演出もあって面白い。一步間違えばグロテスクになりかねないが、そこはロバート・アイクのさじ加減で絶妙に上手くまとまっていた。

事前情報がほとんどなく、原作通り上演するなら6時間はかかるものをどうまとめるかはやはり注目されていた。映画化するように2時間くらいにまとめると思いきや、短い休憩含めて4時間以上の上演時間、驚くべきはサー・イアンがほぼ出ずっぱりであったことだ。演出で座ったり寝転がったりという場面を多めにはしていたが、それでも感服する。あの素晴らしい声で、ファルスタッフの名台詞の数々をシャワーのように浴びるだけでも見る価値があるというもの。セリフを自分の中で消化して、自分の言葉のように話すからこそその説得力があり、本当に素晴らしい。

タイトルロールを Richard Coyle、なぜか筆者は縁があるというか、“Don Carlos”のタイトルロールとピンター作品の主演で見えており、今回が3回目。ウエストエンドでコンスタントに活躍している実力者で、何をいつ見てもうまいが、声の深みといい、美しいたたずまいといい役に嵌っていて個人的には今回がいち

ばんよい芝居だと感じた。ハル役はアルメイダ・シアターの「ロミオとジュリエット」でロミオを演じ、エミー賞の助演男優賞ノミネート経験もある注目の若手俳優 Toheeb Jimoh。華やかでファルスタッフと対等に渡り合っていた。セリフも名優の弱強五歩格に寄せるというより、現代劇風に自分の感情を露わにのびのびと演じていてとてもよかった。今回ミュージカルも演劇もムービングを多用した作品が多かったが、本作は照明もオーソドックスで落ち着いて見られた。最初ヘンリー4世の戴冠からはじまり、最後はハルが戴冠するという演出で、一つのまとまりを作っていたのもよかった。

ファルスタッフを演じるというのでイアン・マッケランは肉襦袢で体を大きく見せていた。プロダクショ



図12 変更されたPRビジュアル

(上が旧版、下が新版)

出典：上：New Winbledon Theatre HP

下：Noël Coward Theatre HP

ンスタート時のビジュアルはかなりスタイリッシュだったが、ガーディアン紙が三つ星と酷評で、サー・イアンが悲劇的でコミカルな役に見えないと指摘したことが堪えたのか、ウエストエンド進出時にはビジュアルがカラフルでコミカルなものに変わっていた（図12）。ただ平均的には四つ星評価で、サー・イアンの演技についての評価は高かった。名優であっても容赦なし、というのはウエストエンドの怖さで、3月にシェリダン・スミス主演、ジョン・カサベテスの映画をミュージカル化した“Opening Night”が鳴り物入りで上演されたが、あまり評判が良くなく途中キャンセルでクローズしている。テレビや映画で活躍しオリビエ賞の演技賞を2度受賞、2024年も演技部門の主演女優賞にノミネートされている彼女でも作品の内容でキャンセルされるという非情さである。厳しすぎるような気もするが、だからこそウエストエンドの舞台のクオリティは維持されているのであろう。

4.2 シアターツアー

日本の場合、バックステージツアーは観劇特典であることが多く、参加することが難しい。東京芸術劇場などの公共施設で一般開放して行われることがあるが、そもそも回数が少なく予定を合わせられないことが多い。ウエストエンドでは、Shakespeare’s Globe、Theatre Royal Drury Lane、Barbican Theatre、Royal Opera House、National Theatre、Royal Albert Hall、London Palladiumでバックステージツアーを開催しており、週に数回の受け入れがあるため日本に比べて参加がとてもしやすい。

今回はNational Theatre、Royal Albert Hallの2劇場を視察することができたので、ツアーについて紹介したい。

4.2.1 National Theatre Guided

National Theatreのガイドツアーは筆者が渡英した時点での料金は15ポンド、おおよそ3,000円だった。このガイドツアーは平日午後5時、土曜は正午に設定されている。75分のツアーは人気があり、20人定員のため早めの予約が必要である。若干料金が高いような気もするが、参加者は当日に限りNational Theatre Bookshopで10%のディスカウントが受けられるため、台本やパンフレット、お土産をたくさん買うと戻ってくる金額でもある。

このツアーは演劇に興味のある人には強くお勧めしたい。National Theatreには3つの劇場、大劇場Olivier Theatre（1,150人収容）、中劇場Lyttelton Theatre（890人収容）、小劇場Dorfman Theatre（450人収容）があり、それぞれに特徴的な3つの劇場の客席に入ることができるからである。開演前の照明や音響チェックをしているところを覗くため、むき出しになった機材など劇中では見ることでできない素舞台を見ることができる。

Olivier Theatreで上演中の“Nye”はとても評判よく、直近のチケットは完売状態だった。イギリスの人気名優マイケル・シーンが主演というのもあったし、内容が画期的なイギリスの国民保健サービス（NHS）を導入したAneurin Bevan、通称Nye Bevanの物語ということもあり人

気があったようだ。余談だが同時期にDonmar WarehouseではKeeley HawesとJack Davenport共演によるルーシー・カークウッドの新作“The Human Body”を上演していた。この作品もNHSに関連した作品で、英国ではちょっとしたNHS回顧ブーム的なところもあった。Olivier Theatreには20台以上の最新ムービングスポットが備えられていて、照明チェックはさながらコンサートリハーサル状態だった。ギリシャ劇場のようなすり鉢状劇場で、とても見やすい劇場である。このガイドツアーは一切写真禁止ということで記録できなかったのが残念である。

Lyttelton Theatreは“Dear Octopus”という名女優リンゼイ・ダンカン主演の家族もので、これもとても評判が良かった作品だったが、Dorfman Theatreで上演中のシニカルな家族もの“Till the Stars Comes Down”の評価のほうが高く、切り口が全く違うとはいえ同様の家族ものということで割を食ったような感じもする。上演時期がずれていたらもう少しいい評価をしてもらえたかもしれないが残念だった。Lyttelton Theatreは典型的プロセニウムシアターで盆があり、一軒家のセットがすでに組まれていた。その前に外壁が吊りもので下ろされていて、飛ばして家の内部を魅せる仕様のよう。オフィシャルトレイラーでは見られた精巧な一軒家のセットの内部が直接見られなくて残念だった。フロントやシーリングなどではなく、前明かりやステージサイドはトーマンタルから機材を仕込んで対応していた。ちょうどマイクチェックをやっていて日本とは違う数字の繰り返しでチェックしているのも興味深かった。

その後、移動のため楽屋スペースを通ることになる。この辺りの大らかさは日本にはなく、少し驚く。実際に何人かの役者とはすれ違い挨拶を交わすようなこともあり、カメラ禁止はどちらかというところのためかとも思ったりした。

最後のDorfman Theatreは直径10mくらいの盆を真ん中に設置した円形劇場仕様になっていた。こちらも立端が高く、ミュージカル並みの数のムービングライトが最終チェックで動いていた。この辺りの技術に投資ができる資金力はすごいと思う。

最後に大道具と小道具の倉庫ツアーもある。歌舞伎座など日本の商業劇場の吊バックを横倒しして描けるような大道具製作場も大きいと思っていたが、こちらは大劇場の舞台空間が入って余る以上の大きさで、天井までがとにかく高い。プロップ制作としてとても恵まれた環境だと思う。

今回3劇場とも公演は見られなかったが、トレイラーをチェックしていたので、わずかながら立体的に作品それぞれを理解できたような気がする。今度は見た芝居のバックステージをじっくり見たいとも思った。

4.2.2 Royal Albert Hall Tour

Royal Albert Hallの名前は、ビクトリア女王の夫君アルバート王子に由来する、王室との関わりが深い劇場である。ビクトリア女王とアルバート王子は、世界の芸術、教育、文化に対する情熱を国民と共有したいという思いを持っており、これらの目的の一環として、アルバート王子は1851年に万国博覧会の企画に加わった。万国博覧会は、開催期間の5か月間で約600万人

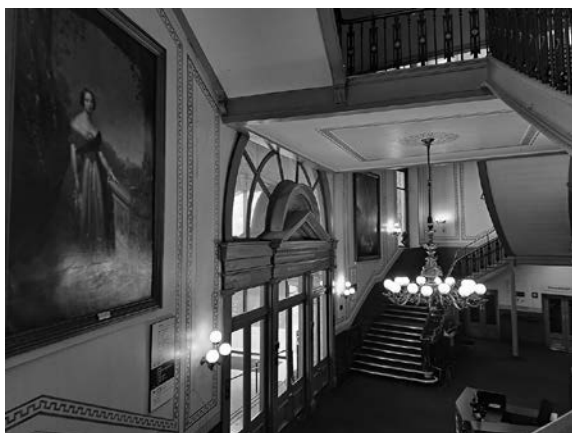


図13 Royal Albert Hallのエントランス
(筆者撮影)

される前の1861年12月14日に急逝。その10年後1871年に芸術科学中央ホールを開場、その建設を構想した人物に敬意を表して、創設時にビクトリア女王によって現在の名称に改称されている。

こちらのツアーは17.50ポンドでおよそ3,500円。ほぼ毎日朝10時から30分間隔で受け入れがあるため、参加しやすいツアーである。ツアーはRoyal Albert Hallのエントランス(図13)から



図14 ロイヤルボックス(筆者撮影)

からはじまり、ビクトリア女王とアルバート王子の肖像画の下で、二人の逸話をガイドから説明を聞くことからスタート。歩いていくとドリンクバーがいくつかあって、後ろにびっしりと磨かれたグラスが並んでいるのに驚く。自動販売機はないので、イベントがある時はカウンターで飲み物を買うシステムなのだそうだ。

客席には王族専用のロイヤルボックスがあって、立ち入りは禁止されているが中は見ることができた(図14)。2階正面中央のブロックで、椅子は一つ一つが独立したものが並べられている形のため、並べ替えが容易になっている。ロイヤルボックスの後方に、通路を挟んで王族の控室(図15)があり、そ

の来場者を迎え、18万ポンドの利益を上げたことから博覧会の王立委員会の委員長として、アルバート王子はこの利益を原資に万博会場の南側のエリアを購入する。この土地に、世界でも最も成功した文化地区の一つを創り、訪問者が無料の博物館や施設で歴史、文化、芸術、音楽、科学の教育を受けられるようにしたいという思いがあり、この一帯はAlbertopolisと呼ばれるようになる。

1852年にビクトリア&アルバート美術館が、1857年に科学博物館がオープンしたものの、アルバート王子は構想が完全に実現

からはじまり、ビクトリア女王とアルバート王子の肖像画の下で、二人の逸話をガイドから説明を聞くことからスタート。歩いていくとドリンクバーがいくつかあって、後ろにびっしりと磨かれたグラスが並んでいるのに驚く。自動販売機はないので、イベントがある時はカウンターで飲み物を買うシステムなのだそうだ。



図15 王族専用控室(筆者撮影)

らは見せてもらえるとのこと。オフホワイトの壁紙はウィリアム・モリスの意匠でレリーフのように美しい。写真では重厚感が全く伝わらず残念である。歴代の王族の写真が飾っており、ビクトリア女王やエリザベス 2 世のポートレートとサインもある。このツアーは全て撮影OKのため、記念撮影をしている人が多かった。

続いてホール内部の最上階 4 階に案内された。おおよそ 6,000 人収容とのこと。舞台の後方には素晴らしいパイプオルガンがあり、その両脇にスクリーンが設置されている。試写会など時にはパイプオルガンを隠すように大きなスクリーンが下りる仕様だそう。007 映画のプレミアが実際にここで行われており、ガイド曰く、エリザベス 2 世が 007 の大ファンだったことから実現したそうだ。4 階は高さがあるため舞台を見下ろすような、落ちたら怖いと思うような視界となっている。この後に 1 階席にも入れてもらい、見え方の違いを確認することができた。この日は次回イベントの照明仕込み日だったようで、多彩なムービングライトのデモンストレーションが見られたのも良かった。会場は古いのだが照明や音響機器は最新のものが入っており、新しさと古さがうまくミックスされている素敵な劇場であると思った。

5. まとめ

今回の視察で筆者の感じたウエストエンドのトレンドの傾向は大きく 3 つ、seamless、universal、gender-free である。

まず seamless であるが、典型的なのは“Hamilton”と“The Picture of Dorian Gray”で、もはや転換という概念がないことである。衣装替えは全場演じながらアンサンブルキャストやスタッフが着替えさせていく、場面が映像のように切り替わっていく作品となっており、映像作品に慣れた現代人寄りの発想なのかとも思う。“Guys and Dolls”“Cabaret”“Harry Potter and the Cursed Child”もこの 2 作品ほどではないが、転換の早い作品となっていて今後もこの傾向は続いていくのだろう。没入感が邪魔されないというのはいいことであるが、頭の中をじっくり整理できないというデメリットもある。もしかするとそれもまた何度も見に行きたくさせる仕掛けなのかもしれない。

2 番目の universal、誰もが見て楽しめるホスピタリティのある作品が、特にそれをアピールすることなく上演されているということだ。“The Magic Flute”や“The Duchess of Malfi”がその好例である。もちろん目覚ましい映像技術の進歩があつてということはあるが、舞台上のキャストの名前がリアルタイムで書き示され、セリフがすべて投影されるというのは聴覚障害者だけでなく、オペラは難しくて見る気がしないなどというような観客の心の垣根を取り払う作用もあるのではないだろうか。日本でも聴覚障害の人のためのタブレット貸出サービスなどはあるが、同じ舞台を見て分かり合えるような演劇づくりを、時には考えてほしいと思う。

最後に gender-free、“Cabaret”ではショーガールを男女混成で演じるという配役にしていたし、サリー役を自由にバイセクシャルなキャラクターに変更したことで、作品に深みが増して

いたように思う。また“The Picture of Dorian Gray”に関していえば、演じるメインの3役が男性ではあるが、女性である Sarah Snook が演じることでドリアン・グレイの神秘性が増し、パワフルなステージになっていたことは事実である。ソンドハイムミュージカル「カンパニー」の主人公を男性から女性に変更して初演したのもウエストエンドであったし、ジェンダーへの柔軟な対応は見習うべきところがある。

影響力の大きいウエストエンドから今後も素晴らしい作品が製作されていくのは間違いない。だからこそ世界中からウエストエンドの舞台を観に人は集まる。数年後の進化したウエストエンドを訪ねるのが今から楽しみである。

【注】

- 1 舞台美術、舞台衣装、演出、エンターテインメントまたはコメディ部門演劇、照明、音響の部門で受賞。
- 2 スタジオジブリのアニメ作品を舞台化したもの。作曲家の久石譲がロイヤル・シェイクスピア・カンパニー（RSC）と組んで2022年10月にバービカンで初演。
- 3 2023年3月から4月にかけて日生劇場と梅田芸術劇場で上演されたものを輸出し英国キャストで上演したもの。スティーヴン・ソンドハイム曲詞で歌詞は英語のため、日本上演時は日本語翻訳版で上演された。
- 4 2024年10月現在 [westendtheatre.com](https://www.westendtheatre.com) に掲載されている劇場数。サイトにはナショナルシアター全体およびナショナルシアターのオリビエ、リットルトン、ドーフマンの3劇場を個別に4劇場として記載されているため56劇場となっているがナショナルシアターは3劇場の総合名のため省き55劇場とした。またナショナルシアターやシェイクスピアグローブなどは正確にウエストエンドと定義された地区からは離れて点在しているが、通常ウエストエンド内の劇場として呼びならわす。
- 5 1984年にローレンス・オリビエが名前の使用を許可、以後現在も使用されるオリビエのブロンズ像が授与されるようになる。それ以前は「アーニー」と呼ばれた青いウェッジウッドの壺が渡されていた。
- 6 これまでは2月発表だったがコロナ期に10月発表となり、その後は4月発表となっている。
- 7 演技賞については新作・リバイバルのカテゴリー分けはない。
- 8 2024年4月1日にプレビュースタート、4月21日にオープニングを迎えた。
- 9 ユニバーサルはこのプロダクションのブロードウェイ初演時からプロデューサーとして名を連ねている。
- 10 2022年1月28日 Variety におけるスティーヴン・シュワルツが回答したインタビュー記事より。
- 11 2020年5月23日 Zoe Paskett による記事。4曲紹介されており‘Defying Gravity’のほかには「ドリームガールズ」の‘And I Am Telling You I’m Not Going’、「オペラ座の怪人」タイトルソング、ソンドハイムの名作「カンパニー」中の‘Getting Married Today’が挙げられている。

- 12 黒人という表記が現在においては非常に誤解を生むと考えるが、2021年9月16日 [blackhistorymonth.org.uk](https://www.blackhistorymonth.org.uk) の記事に Lucy St Louis, The World's 1st black Christine Daae in The Phantom of the Opera という記載があり、直訳として本稿では使用した。
- 13 1部2部を別日に買うことも可能だが、基本的にはセット販売である。販売サイトで日程と座席を選ぶと自動的に1部2部同座席での予約となる。
- 14 ヴォルデモートはプログラムのみクレジットで、第2部が終わるまで配役を見ないようにという指示が書かれている。

【参考文献】

<ホームページ>

<https://www.blackhistorymonth.org.uk/>

<https://bridgetheatre.co.uk/about-the-bridge-theatre/>

<https://www.ibdb.com/>

<http://newwimbledontheatre.net/>

<https://www.ntlive.jp/>

<https://officiallondontheatre.com/>

<https://www.royalalberthall.com/>

<https://www.shakespearesglobe.com/>

<https://www.standard.co.uk/culture/theatre/hardest-musical-songs-to-sing-high-note-a4448611.html>

<https://www.theguardian.com/stage/2024/apr/11/player-kings-review-ian-mckellen-falstaff-noel-coward-theatre-london>

<https://www.westendtheatre.com/theatres/west-end-theatres-in-london/>

The Dynamism of Theaters as the Cultural Tourism Resources: From the Examples of London's West End

Kayoko Motai

Abstract

London's West End is a city that attracts visitors with theatre as a tourism resource, along with New York's Broadway. The Japanese theatre world has many revivals of hit West End and Broadway productions, and the current situation is that the trends of these two major cities are directly trending in the Japanese theatres. This paper is introducing the popular West End productions and theatres that we visited and watched from February to March 2024, and compare them with the results of the Laurence Olivier Awards announced immediately afterwards to consider the trends in the West End and their impact on the Japanese theatres.

Keywords: theater, West End, cultural tourism, musical

